

知床岬における新たな捕獲手法(仕切り柵使用)の検討について

資料2-2(参考)

仕切り柵を用いた銃猟と従来型の巻狩りの比較

仕切り柵使用の銃猟

- 1) 捕獲はフェンスと地形で狭隘になった地点で行うため、待ち構えて銃撃するハンターは少数でよい。1ヶ所あたり1~3名程度。10~12名程度でも従来型の巻狩り以上の効率的捕獲が期待できる。また、6~7名の少数でも捕獲が可能。
- 2) 事前に捕獲地点移動して配置につく「待ち隊」のハンターは少数であり、人の移動による攪乱は最小限に抑えることが可能。
- 3) 配置完了後には、フェンス内のシカは完全に閉じ込められた状態になる。勢子隊に追われてフェンス外に逃れることはできない。勢子隊を突破・逆行したシカも囲いから逃げることはできず、繰り返し追って捕獲を試みることが可能。
- 4) B~D地点間にフェンスを設置することで、希少猛禽類営巣木付近へのシカの逃走を完全に防ぐことができ、希少猛禽類への影響を最小限に抑えることができる。
- 5) フェンス内にシカを閉じ込めるため、シカの追い出しはどちらの方向にでも自由に設定できる。また、何度でも繰り返し行うことができる。
- 6) 最終追い込み地点では狭隘部にシカが集中することが予想されるため待ちのハンターと勢子隊のハンターの間で射線が集中的に交差しかねないので安全上の配慮が重要。勢子隊は最終追い込み地点にあまり接近せずに遠巻きに包囲網を維持すること、また、待ちのハンターは高所から撃ち下ろす射線になるようにすることなどの配慮が必要。
- 7) 最終追い込み地点付近の狭隘部にヒグマが追い込まれた場合、フェンスやあらかじめ設置されたオーバースを登って逃げる余裕がない時、ヒグマが攻撃してくることがあり得るので、慎重な対応が必要。

従来型巻狩り

- 1) シカを囲い込むために大人数が必要(これまで20~25名で実施)。特に、待ち隊は十分な人数がいなければ捕獲が困難。
- 2) 大人数を動員するために、待ち隊も勢子隊も配置付くための移動の際に攪乱してしまう。捕獲開始前に包囲網の外に逃げるシカが多い。
- 3) 配置完了後も、勢子隊に追われて尾根越えなどして包囲網の外に逃走するシカがあり、それらの阻止できない。また、逆行して勢子ラインを突破したシカをそれ以上追うことは不可能。
- 4) 包囲されたシカは、B・C・Dの3点に囲まれた針葉樹の多い森林内で躊躇し、B地点北側やB地点から希少猛禽類営巣木付近で包囲網を突破しようとするが行動が目立つ。それらのシカを捕獲するために営巣木に近い地域での発砲が多くなり、希少猛禽類への影響があり得る。
- 5) 希少猛禽類営巣木付近での接近や発砲を避けるために、先端部の東側から西側への巻狩りをこれまでも試みてきているが、シカはB・C・Dの3点に囲まれた針葉樹の多い森林に執着して逃げ込もうとし、また、B~D間より南方やB~営巣木付近の稜線へ逃走しようとする傾向が強く営巣木への接近を回避するのが困難。
- 6) シカや待ち・勢子双方のハンターは比較的拡散しており、十分に視認した上で射撃することで、比較的 safely に捕獲を行うことができる。
- 7) 基本的に開放系の空間における巻狩りであり、ヒグマが囲い込まれた場合も、落ち着いて慎重に対応すれば、ヒグマをやり過ごして、シカだけを追い詰めることが可能。

知床岬シカ捕獲用仕切柵の配置と運用のイメージ

A~Dのフェンスラインより北側に侵入したシカについては、矢印（オレンジ色）のような追い込み猟を行い、フェンス末端と海岸の間の狭隘部（A,C,D）、あるいは、フェンスによって漏斗状に狭まっている地点（E）に追い込んで捕獲する。これらにより、先端部の草原・森林へのシカのアクセスを抑制するとともに、希少猛禽類の営巣への影響を軽減しながら、個体数調整を容易にする。

金網のメッシュサイズは、キツネなど中小動物がぐりぬけることが可能なものとし、野生動物の移動を妨げぬようにする。ヒグマについては、図2のような木製のオーバーパスを各所（多めに配置）に設け、登って越えることができるようにする。ヒグマはフェンスの金網も登ることも不可能ではないが、支柱が金属製のため、登りづらく、無理に登ることでフェンスを破損させたり、地面を掘ってぐり抜けようとして抜け穴を作ってしまうことが予想されるので、オーバーパスで移動を容易にする。オーバーパスは追い込み猟の際などに人間の移動にも便利である。

尚、フェンスが漏斗状になっている地点（A、E）には、シカを追い込み保定することができる装置（図3）をあらかじめ設置、あるいは、必要に応じて設置可能な構造とし、調査研究のための生捕りや標識装着も可能とする。

その他、フェンス設置の結果、シカが頻繁に通るようになると思われる場所のフェンス沿い各所に、図1のようなハイシートを設置して（餌付けも併用？）、狙撃できるようにし、追い込み猟以外の時期にも少人数による捕獲を効率的に行うことが可能になる。尚、図1は一時的に使用する市販品のハイシートであるが、長期的に使用可能で強風にも耐えることができる木製のやぐら状のものを組むことも考えられる。追い込み猟においても、A地点では同様のやぐら状のものを組み、「撃ち下ろす」射線にすることで安全性を高めることも有効。 フェンス延長距離：A~D:1982m B~C:1021m 計:3003m（距離は概算）



図1：市販品のハイシートの一例

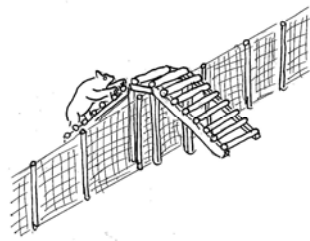


図2：ヒグマ・人間兼用のオーバーパスのイメージ

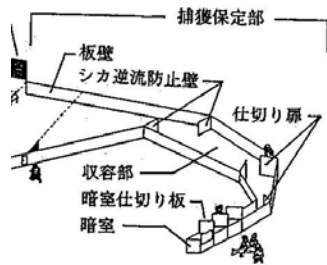


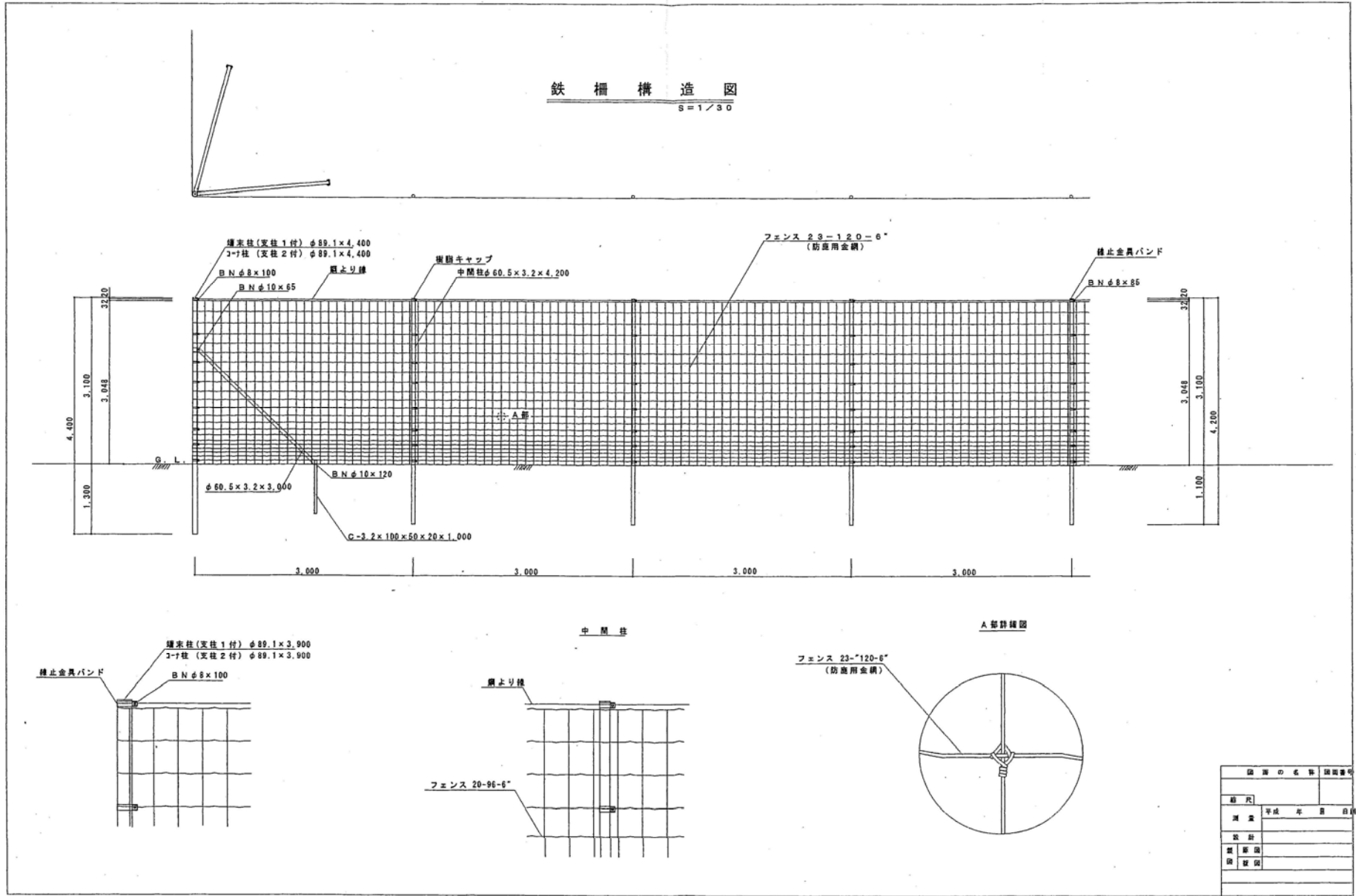
図3：エゾシカ捕獲保定装置末端部のイメージ

(H6年度科技庁委託研究「自然度の高い生態系保全を考慮した流域管理に関するランドスケープエコロジーの研究」において、真鯉地区で使用した捕獲装置の例)



知床岬仕切柵の基本構造イメージ

高さ約3m 支柱は亜鉛メッキ鉄パイプを使用(木材より耐用年数が高い)。 金網のメッシュサイズはキツネなどの中小動物がくぐりぬけることが可能なものとする。 森林管理局設置の岩尾別地区のカシワ林保護柵と同様の構造。



仕切り柵・銃猟併用方式のメリットとデメリット

• メリット

- 捕獲効率の大幅な向上 捕獲コストの低下
- 希少猛禽類の営巣地への影響を軽減
- 柵内の捕獲により、シカの忌避学習効果があった場合
 - 柵内に入るシカは減少し、柵による物理的なアクセス抑制と相まって、先端部の植生が回復が早まる。
- 柵内の捕獲による忌避学習効果より、冬期の餌資源の魅力が大きく、引き続き柵内へのシカの侵入が続く場合。
 - シカを柵内に誘引して、入り込んだシカを効果的に捕獲し続けることが可能な捕獲装置として機能する。柵内ばかりでなく、先端部地区全体のシカの個体数を低下させることができる。
- 生体捕獲対応型の捕獲保定構造をつけた場合：標識調査などシカのモニタリング調査への活用も可能
 - 知床岬の越冬群は閉鎖系ではない可能性があり、同地区で越冬するエゾシカの季節移動などを更に詳細に調査する場合、効率的に生け捕りする装置を付設できることは有益。

• デメリット

- 大規模施設となる
 - 建設費用が高価： 数千万円程度
 - 景観上の課題（森林内への配置で問題は軽減可能）
- 強風地域で、風の影響や倒木の影響がある。メンテナンスコストが必要
 - 柵の物理的排除効果だけで、植生を保護するのではないので、粗放的なメンテナンスで十分
 - ヒグマによる破壊もあり得る。
- 縦走登山者などの到達感の魅力低下
- 柵内の捕獲により、シカの忌避学習効果があった場合
 - 柵外の森林や草原におけるシカの採食圧が高まる？
- 柵内の捕獲による忌避学習効果より、冬期の餌資源の魅力が大きく、引き続き柵内へのシカの侵入が続く場合。
 - 先端部地区全体のシカの個体数が低下するまで捕獲し続けないと、シカの侵入と採食が続く。
- 岬地区の特殊な地形や条件を活用したものであり、他の地域で応用できる技術とはならない。